

Title	文学と認識論：フロベールと歴史のエクリチュール
Sub Title	Littérature et épistémologie : Flaubert et l'écriture de l'histoire
Author	小倉, 孝誠(Ogura, Kōsei)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.71 (2020. 10) ,p.87- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20201031-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学と認識論

——フロベールと歴史のエクリチュール——

小 倉 孝 誠

「歴史とは現在からなされた過去の考察にほかなりません。したがって、歴史は絶えず書き直されるべきなのです」(ギュスターヴ・フロベール、1864年11月の手紙)

「歴史は現在と過去の対話である」(E.H. カー『歴史とは何か』)

1864年11月初旬、ギュスターヴ・フロベールは数多い文通相手の一人であり、長年の友人でもあるロジェ・デ・ジュネット夫人に宛てて、かなり長い手紙を書いた。夫人は文学的素養に富んだ聡明な女性で、自分が読んだ著作についてしばしばフロベールに感想を披瀝していた。当時刊行されて間もない歴史家ジュール・ミシュレの『人類の聖書』と題された著作に夫人は感嘆し、その感嘆をフロベールと共有しようとした。フロベールの書簡はそれにたいする返信である。彼は『人類の聖書』に留保付きの賛辞を呈した後に、次のような一節を記している。「いずれにしても、誰もが自分なりの方法で、自由に歴史を見ることが出来ます。歴史とは現在からなされた過去の考察にほかなりません。したがって、歴史は絶えず書き直されるべきなのです」¹⁾。

1864年当時、フロベールは大作『感情教育』を執筆していた。パリを舞

1) Lettre à Edma Roger des Genettes, novembre 1864, *Correspondance*, t. III, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1991, p. 414.

台に、1840年に起点を置き、1848年の二月革命、第二共和政とルイ・ボナパルトのクーデタ（1851年）に至る時代を背景にして、みずからの世代の「精神史 *histoire morale*」を描いた小説である。歴史小説としての側面を有するこの作品に取り組んでいたフロベールにとって、「歴史とは現在からなされた過去の考察にほかなりません」という一文は、自分の文学的企図を正当化するための立場表明でもあったはずだ。歴史学はそれを実践する者の現在と切り離すことができないことを、作家は鋭く洞察していた。

他方、E.H. カーの『歴史とは何か』（1961）が、歴史学への入門書として古くから定評があり、現在でも広く使われ、読まれている著作だということは、あらためて指摘するまでもないだろう。そのなかでも「歴史は現在と過去の対話である」²⁾ という一文は、歴史学という学問の基本精神を表現した定式として有名である。

フロベールとカー。一方は19世紀を代表するフランスの小説家の一人、他方は20世紀イギリスのみならず世界の歴史学界において大きな存在感を放った歴史家にして外交官。直接的な接点はどこにもないし、カーがフロベールの愛読者だったということもないようだ（少なくとも筆者は寡聞にして知らない）。時代も、知的背景も異なる二人の人間が、しかし歴史と歴史学をめぐって奇しくも同じような認識を共有していたことは興味深い。歴史学とは過去に起こった出来事や現象を客観的に叙述することではなく、叙述する人間がみずからが寄って立つ現在という時点から、したがって現在の状況の作用をこうむりながら過去を解釈し、分析し、再現＝表象する学問だと二人の著者は一致して主張しているのだから。

ことはフロベールに限らない。フランス、そして西欧の19世紀は、しばしば「歴史の世紀」と呼ばれる。それは19世紀西欧の歴史家たちが、自分たちの知的営為にたいしてきわめて意識的になり、叙述の方法論を練りあげ、対象を明確に同定することによって歴史学をひとつの自立した学問として体系化したからである。その過程は、それぞれの国において国民史が成立して

2) E.H. カー『歴史とは何か』清水幾太郎訳、岩波新書、1962年、p. III。

いく過程と軌を一にする。歴史研究が「文芸」からしだいに分離し、文学の一ジャンルではなく一つの学問（＝科学）としての地位を確立していった。そして世紀末には、大学の研究と教育という制度的な場において主要な地位さえ占めるようになる³⁾。

このような歴史の世紀を生きた作家たちは、歴史をどのように認識し、それをみずからの作品にどのように取りこんだのだろうか。ギュスターヴ・フロベール（1821–1880）を例にとり、その問いにたいする回答のささやかな素描を、以下のページで提供してみたい。

フロベールの歴史への関心

今日『ボヴァリー夫人』（1856）や『感情教育』（1869）の作家として知られるフロベールは、幼い頃から歴史への関心を示した。中等学校時代からすでに、教師たちの指導もあって、歴史的な物語や歴史を扱う論述文を執筆している。その多くは、フランス語や歴史の授業の一環として、つまり学校の教育カリキュラムの一部として書かれたものだが、王侯貴族の政治的な権謀術数と、時には凄惨な結末を主要テーマとして取りあげており、明らかにロマン主義作家たちから靈感を受けていた。19世紀前半のロマン主義時代には、ギゾー、ティエリー、ミシュレなど傑出した歴史家が輩出し、デュマ・ペールやユゴーが歴史を題材にした小説や戯曲で一世を風靡した時代である。シャトーブリアンが「今日、論争、戯曲、小説、詩などすべてが歴史のかたちをまとう⁴⁾」と『歴史研究』のなかで指摘したのは、1831年のことだ。

3) 19世紀後半のフランス、教育や研究の場で歴史学が制度的にどのように確立したかについては、次の著作を参照のこと。Charles-Olivier Carbonell, *Histoire et historiens. Une mutation idéologique des historiens français 1865–1885*, Privat, 1976. 二宮宏之「歴史的思考とその位相——実証主義歴史学より全体性の歴史学へ」、『全体を見る眼と歴史家たち』木鐸社、1986年、pp. 17–48. 渡辺和行『近代フランスの歴史学と歴史家——クリオとナショナリズム』ミネルヴァ書房、2009年。

4) Chateaubriand, *Études historiques*, dans *Œuvres complètes*, Garnier, s.d., t. IX, p. 50.

十代のフロベールがとりわけ強く興味を惹かれたのが、時代的には中世と16世紀であり、地理的にはフランス、そしてイタリアとスペインだった。たとえば、14世紀末から15世紀初頭、シャルル七世時代の内乱を背景にした歴史短編『王冠にかけられた二つの手』(1836)や、15世紀を代表する国王の後半生を描いて、波瀾万丈の筋立てを展開する五幕からなる戯曲『ルイ十一世』(1838)などは、いかにもロマン主義的な雰囲気さを漂わせる作品である。フロベールの初期作品を分析したジャン・ブリュノーが、1835-38年の数年間を「歴史的作品群の時代」と名づけたのも、理由のないことではない⁵⁾。やがて若きフロベールは哲学的・神秘主義的な小品や、自伝的な物語へと創作の軸足を移していくことになり、「歴史的作品群の時代」は終焉する。いずれにしてもこの時期の作品群が、若きフロベールが過去にたいして強い情熱をいだき、中等学校における歴史教育を熱心に摂取したことを証言していることは疑問の余地がない。そしてこれらの作品では、地方都市に住む作家志望の青年の知的軌跡が、パリで流行したロマン主義文学の変遷を、いくらかの時間的なずれを伴いながらも忠実に映しだしていたのである。

いったん途切れたかに見えた歴史への興味は、1845年の初稿『感情教育』のなかで復活する。これはジュールとアンリという二人の親しい友人の対照的な人生の軌跡を描いた、一種の教養小説である。とりわけ最終章では、主要な作中人物たちの人生の決算が語られるのだが、そこでジュールは恋に破れ、友情の稀薄化を知り、幻想を失ったことが読者に伝えられる。この小説が歴史的な事件を語っているというわけではなく、歴史への興味は、文学青年ジュールの知的な成長の過程で示される。そしてそこでは、歴史を対象とした哲学的思索と、歴史小説という文学ジャンルに関する考察という二つの次元が強調されることになる。

まず語り手は、ジュールが長い感情的、知的な遍歴の末に辿り着いた美学と哲学を要約してみせる。ジュールから見れば、芸術家というものはみずからの作品中で、人類全体を表現することを主な使命にすべきであり、歴史は

5) この点については、次の研究を参照せよ。Jean Bruneau, *Les Débuts littéraires de Gustave Flaubert*, Armand Colin, 1962, 1^{ère} Partie, ch. IV.

人類の生を構成する不可欠な次元にほかならない。

同じような危機、同じような思想の定期的な回帰、ひとが原因と呼び、結果と呼ぶものの繋がりの中にはひとつの芸術が存在する。したがって、それらすべてがあらかじめ調整されていたのかと思われるほどだ。まるで完璧な有機体のように整った外観の下で絶えず発展し、絶えず作用を及ぼしているのだから⁶⁾。

歴史とは、理解しようとする試みを拒むような混沌とした出来事の連続などではなく、調和ある、秩序だったプロセスであり、何らかの因果性にもとづいて展開しているのではないだろうか。「同じような危機」、「同じような思想」が定期的に出現してくるのだから、人類の歴史に完全な断絶というものはない。しかし反復はかならずしも停滞や滞留を意味するわけではない。歴史においては個別的なものと一般的なもの、部分と全体がお互いに支えあい、呼応しあう。ジュールにとって、歴史とは絶えず刷新されていく有機体のような実体ということになるだろう。

ジュールは人類の歩みをめぐって、抽象的、形而上学的な思弁の段階に留まってははいない。歴史のプロセスに何らかの法則性がないかを発見するためには、まず各時代、各世紀がはらむ特異な様相を明らかにする必要があるだろう。それぞれの時代や世紀はそれ自体でひとつの全体性であり、固有の相貌と力学をもつ。その時代を再構成するためには、出来事のみならず思想、習俗、愛や希望、喜びや苦悩など、人間生活のあらゆる側面を考察しなければならない。あらゆる世代はそれ特有の集団的な心性をそなえ、特徴的な体系をはらんでいる。これが歴史に関するジュールの思索の到達点であり、それはほとんど、20世紀にリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックが創設したアナール学派の綱領と同じである。

6) Flaubert, *L'Éducation sentimentale (1845)*, dans *Œuvres complètes, I, Œuvres de jeunesse*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2001, p. 1036.

歴史の認識論から歴史小説へ

作家がみずからの時代とのあいだにしかるべき距離を置くという条件の下で、このような考察は現在という時代にも適用されうるだろう。ジュールは次のように考える。「しかるべき距離を取れば、つまり細部が見失われるほどには隔たっておらず、かといって細部が全体を支配するほどに近すぎるのでもなければ、19世紀について実現すべき素晴らしい芸術作品があるはずだ、という確信をジュールは抱いた⁷⁾。」ひとつの時代の全体と部分、統一性と多様性を相互作用のなかで語れば、時代の表象は完全なものになるだろう。とはいえ、それは容易ならざる壮大な企図であることは間違いない。

実際、ジュールはその企図に着手し、当時流行していた歴史小説に手を染めることで、文学の新たな道を模索しようとする。それがジュールと歴史の関係をめぐる第二の側面である。しかし歴史の表象をめぐるひとつの理想を定式化したものの、実際に作品の執筆を始めてみると大きな困難にぶち当たってしまう。そしてその困難がかえってジュールに歴史小説の美学のみならず、歴史認識そのものを深化させる契機をもたらすのだった。彼の知的成長を語る長い一節を引用しておこう。

ジュールは知った。何かを排除するものはすべて何かを縮める。何かを選択するものはすべて何かを忘却する。何かを切り刻むものはすべて何かを破壊する。叙事詩は歴史ほど詩的ではないし、たとえば歴史小説がたんに歴史的であろうとするのは大きな誤りだ。誰かが何らかの先入観にもとづいて、その先入観をどこかにしかるべく収めるために、過去をそれが生起したのと異なる色彩の下に考察し、事実を作り直し、人々を調整するならば、その人は生命のない偽りの作品にしか到達しないだろう。歴史はつねにそこに存在し、みずからの巨大な高みと充実した全体によってその人を押しつぶす。歴史と肩を並べる唯一の手段は、歴史

7) *Ibid.*, p. 1043.

の要請に到達し、歴史が語らなかったことを補うことだろう。とはいえひとつの時代を理解するためにどれほどの教養が、その教養を身につけるためにどれほどの学識が、それを応用するためにどれほどの思慮分別が、そして物事が生じたとおりに見きわめるためにいかなる知性が、物事を再現するためにいかなる生得的な力が、とりわけそれらを理解させるためにいかなる美的感覚が必要なことか！⁸⁾

最後で述べられている困難は、後年フロベールがみずから歴史小説を執筆する時に実際に体験することになる。ここでは歴史小説における知と想像力、学識と創造力の関係という現代文学にまでつながる根本的な問いが提出されている。

初稿『感情教育』の最終章において、主人公ジュールは歴史のプロセスをめぐる認識論を試み、歴史の芸術的な表象について美学を定式化し、より具体的には歴史小説の作法を考察するに至る。しかし、ジュールみずからがこの美学を具現した作品を書くことはない。初稿『感情教育』は、哲学的、美学的な言説に多くのページを割くことによって、ひとりの若き芸術家の誕生を物語る。しかしこの作品のなかで、歴史が、その動的なプロセスと力学そのものが描かれることはない。主人公ジュール自身が属する世代の集団的なアイデンティティーが際立たせられているわけではない。彼が練りあげた文学的な野心は、初稿『感情教育』という作品においては実現されていないのだ。

小説の主人公の知的遍歴をつうじて明らかになるのは、1845年フロベール24歳のときの歴史観であり、歴史小説に関する考え方である。その後、作家は友人や知人に宛てた数多くの手紙のなかで、同じ主題に繰り返しかえし立ち戻ることになる。次に『書簡集』に依拠して、フロベールが同時代の歴史研究と歴史小説をどのように捉えていたかを考察してみよう。

8) *Ibid.*, p. 1041.

フロベールは同時代の歴史小説をどう読んだか

言うまでもなく、近代西欧における歴史小説の創始者はイギリスのウォルター・スコット（1771–1832）であり、彼の作品は19世紀前半に大きな成功を取め、当時のフランス小説に無視しがたい影響を及ぼした⁹⁾。1823年の論考で、ユゴーは彼の作品がスコットランドの歴史を具体的に喚起すると同時に、巧妙で劇的な筋立ての物語を展開していることを高く評価した。「ウォルター・スコットは、年代記がもつ詳細な正確さ、歴史がもつ荘厳な雄大さ、小説がもつ強烈な面白さを結びつけた¹⁰⁾」。バルザックは『人間喜劇』の「総序」（1842）のなかで、「ウォルター・スコットは、小説を歴史が有する哲学的な価値にまで高めた。そして小説において悲劇と、対話と、肖像と、風景と、描写を糾合した¹¹⁾」と、確信に満ちた口調で主張している。19世紀初頭まで文学世界において詩や演劇ほど高い地位を占めていなかった小説ジャンルの価値を、スコットが飛躍的に高めるのに貢献したことを、ユゴーとバルザックは一致して認めたのだった。二人の目には、スコットの作品が想像力と認識、物語と歴史探究を結びつけたように映じた。

他方フロベールのほうは、スコットの文学に讃嘆の念を隠さないものの、

9) この問題については、cf. Louis Maigron, *Le Roman historique à l'époque romantique*, Champion, 1912 ; Claudie Bernard, *Le Passé recomposé. Le roman historique français du dix-neuvième siècle*, Hachette, 1996, pp. 43–51. また歴史小説論の古典であるジェルジ・ルカーチ『歴史小説論』（1947年、邦訳は伊藤成彦・菊盛英夫訳、白水社）は、第I章でスコットとその全ヨーロッパ的影響について詳細に論じている。スコットの歴史小説については次の2冊が参考になる。樋口欣三『ウォルター・スコットの歴史小説』英宝社、2006年；米本弘一『フィクションとしての歴史——ウォルター・スコットの語りの技法』英宝社、2007年。

10) Victor Hugo, « Sur Walter Scott, à propos de *Quentin Durward* », dans *Littérature et philosophie mêlées, Œuvres complètes de Victor Hugo*, « Critique », Robert Laffont, 1985, pp. 146–147.

11) Balzac, « Avant-Propos » de *La Comédie humaine*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. I, 1976, p. 10.

そこにはいくらかの留保がつけられていた。友人ルイ・ブイエ宛の手紙(1854年8月7日)には、次のように書かれている。「手に汗握りながら、僕はウォルター・スコットの『海賊』を読んだ。とても美しい小説だが、長すぎるね。それでも僕の想像力は刺激されたよ¹²⁾」。それから13年後、ジョルジュ・サンド宛の手紙では、『パースの美しい娘』を読んだ感想を書き記している。「あなたの言葉を思い出して、いま『パースの美しい娘』を再読しています。ひとが何と言おうと、素敵な作品です。あの男にはたしかに想像力が具わっていましたが¹³⁾」。他の英国作家に較べればスコットの作品は構成がしっかりしている、とフロベールは考えていた。このようにスコットの価値をある程度認めるものの、ユゴーやバルザックに比してフロベールの評価はかなり抑制されたものだ。

こうした留保の態度は、遺作となった『ブヴァールとペキュシェ』(1881)のあるエピソードにも表われている。歴史に興味を抱いた二人の主人公は、想像力によって構築された歴史の世界に沈潜しようとして歴史小説に手を伸ばすのだが、その時真っ先に読むのがスコットの作品なのだ。スコットの作品は登場人物の清冽な活気と絵画的な描写によって、ブヴァールとペキュシェを一時は熱狂させる。「モデルとなったものを知らなかった二人は、その描写が現実によく似ていると思ったし、幻想は完璧だった¹⁴⁾」。しかしこの幸福な幻想は長く続かない。スコットに見られる歴史上の思い違い、軽率な誤謬、同じような効果や結末の反復が、最後には二人を歴史小説から離反させてしまうのである。

フロベールが同時代のフランス作家のなかで、その歴史小説を評価したのはユゴーである。1853年、恋人ルイズ・コレに宛てた手紙において彼は、中世のパリを舞台にした『ノートル＝ダム・ド・パリ』(1831)を絶賛する。「『ノートル＝ダム・ド・パリ』はなんと素晴らしい作品でしょう！ 最近そのなかの三章、とりわけ「乞食たち」の略奪を語る章を読み返しました。

12) Flaubert, *Correspondance*, t. II, 1980, p. 564.

13) Flaubert, *Correspondance*, t. III, 1991, p. 599. 1867年1月23日付の手紙。

14) Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, Gallimard, « Folio », 1979, p. 201.

なんとも力強いページです¹⁵⁾」。他方で、フランス革命期を背景にして王党派と共和派の抗争を物語る『九十三年』(1874)については、それが近年のユゴーの諸作品よりも優れていると認め、とりわけ第一巻の前半部で描かれる森のなかの進軍やブルターニュの風景が見事な出来ばえであると称賛するものの、作中人物の造型が単調で、陰影に乏しいと批判した。「彼らは皆、舞台の役者のような話し方をします。あの天才にも、人間を造型する才能は欠けているのです¹⁶⁾」。このほか、17世紀の存在した貴族トリシュリュウ枢機卿の対立をとおして、貴族階級と王権の角逐を描いたヴィニーの『サン＝マル』(1825)にも見事なページがある、とフロベールは評価するが、それ以上の詳細な分析はない。

このように、同時代に流行した歴史小説というジャンルに属するいくつかの作品にフロベールは書簡集のなかで言及しているものの、その言及は少なく、深い分析にまで至っていない。それを読んだだけでは、彼自身がこのジャンルをどのように規定し、その理想をどこに置いていたかは分からないのである。個別の作家や作品にたいする判断は下されているが、それが彼自身による歴史小説に関する考察を促したようには見えない。評論を公表することがなかったフロベールの場合、重要な文学観や美学は書簡のなかで定式化されることが多いのだが、歴史小説については事情が異なる。初稿『感情教育』の主人公ジュールは歴史小説の困難さに想到していたが、まだ実際に歴史小説に手を染めていなかった頃のフロベールは、歴史と物語、事実と想像力の関係をめぐっての思索を十分には深めていない。

歴史家をどう読んだか

では歴史家たちに対してはどうだったのだろうか。少年時代から歴史と歴史叙述に興味を抱き、学校教育の一環とはいえみずからも歴史的な論述を試みていたフロベールだから、歴史家の著作についての注釈が彼自身の歴史家

15) Lettre à Louise Colet, 15 juillet 1853, *Correspondance*, t. II, p. 385.

16) Lettre à Edma Roger des Genettes, 1^{er} mai 1874, *Correspondance*, t. IV, 1998, p. 793.

像を照射してくれると予想できる。

実際、この点できわめて興味深いテキストが存在する。フロベールがヴォルテールの『習俗論』（1756）を熟読したうえで書き残した読書ノートである¹⁷⁾。正式には「シャルルマーニュ帝からルイ十三世に至るまでの習俗、諸国民の精神、そして歴史の主要な出来事に関する試論」という長い表題をもつ『習俗論』は、中世から17世紀初頭までの主にヨーロッパの歴史の流れを概観した歴史書であり、歴史哲学の書になっている。ヴォルテールの熱烈な愛読者だったフロベールの読書ノートは、数多くの引用文と興味深い注釈から構成されている。そこでの彼は、精彩あふれる歴史の細部や哲学的な箴言を好んでいることが分かる。そのうえ、19世紀の歴史学の成果と照合しながら、ヴォルテールが歴史上の事件と現象について下す判断に賛同したり、逆に反駁したりする点が示唆的である。

たとえば『習俗論』の著者によれば、中世に名誉心は存在しなかったとされるが、フロベールはその見解に異議を唱える。「現代の歴史学によれば、名誉心は中世のもっとも華やかな精髓であるのに、ヴォルテールは気づいてもない」。北イタリアの覇権をめぐるフランス軍がハプスブルグ家のカール五世に敗れたパヴィアの戦い（1525）について、ヴォルテールはそれが運命の偶然であると同時に、世界の出来事の必然的な繋がりを示すと論じたが、その議論にたいしてフロベールは「現代の若い歴史学派が述べたのもまさにそのことではないか？¹⁸⁾」と注釈を加えている。一見偶発的な出来事にも、大局的に見れば歴史の流れをつかさどる論理が貫いている。ロマン主義時代には、出来事や事件の年代記的な継起を超えたところに歴史の深い法則性があるはずだという「哲学的歴史」の流れ（『ヨーロッパ文明史』の著者フランソワ・ギゾーが代表）が成立していた。フロベールはそれを念頭に置きながら、ヴォルテールの歴史叙述のなかに、ロマン主義時代の歴史学

17) この読書ノートは次の文献に収録されている。Théodore Besterman, « Voltaire jugé par Flaubert », *Travaux sur Voltaire et le XVIII^e siècle*, Genève, t. I, 1955, pp. 133–158.

18) *Ibid.*, pp. 145, 152.

の先駆を見てとったのだった。

すでに述べたように、西欧の19世紀は「歴史学の時代」である。ロマン主義時代の歴史家たちは史料の蒐集と批判に意識的になり、分析の方法を研ぎ澄ませることによって歴史学を自立した学問の地位にまで高めようとした。そしてそれぞれの国民 nation の起源と発展を問う国民史が確立していった。19世紀については、確かに歴史学の誕生を語ることができるだろう。とりわけ世紀前半のフランスで活躍した歴史家たちは、歴史の解釈と歴史叙述の方法を大きく刷新したという意味で特筆に値する¹⁹⁾。同時代の歴史書の熱心な読者だったフロベールは、そのような歴史学の変遷に精通していたし、とりわけスコットの歴史小説の影響を強く受けて、歴史叙述に物語の技法とレトリックを採り入れた「物語学派」には親近感を覚えた。少年時代からすでに「バラントの『ブルゴーニュ公の歴史』は歴史学と文学の傑作である」と絶賛し、オーギュスタン・ティエリーの代表作『ノルマン人によるイングランド征服の歴史』(1825)をぜひ読むよう、姪のカロリーヌに勧めたほどである²⁰⁾。

しかし19世紀の歴史家のうちでフロベールがもっとも高く評価したのは、ジュール・ミシュレである。「物語学派」や、それと対比されるギゾーらの「哲学的歴史」から距離を置き、民衆を歴史の主体とする歴史観を樹立し、今日の社会史や心性史の先駆者として20世紀のアナル学派を先取りするとされるミシュレが、フランス19世紀を代表する歴史家であることは言うまでもない。フロベールは彼の『ローマ史』(1831)を愛読し、主著『フランス革命史』(1847-53)を六、七回読んだと言明し、彼の解釈の独創性、洞察の深さ、そして精彩に富む表現力を絶賛した²¹⁾。

他方、冒頭で触れた『人類の聖書』(1864)については、両義的な評価を

19) フランスのロマン主義歴史学については次を参照のこと。飯塚勝久『フランス歴史哲学の発見』未来社、1995年；小倉孝誠『歴史と表象 近代フランスの歴史小説を読む』新曜社、1997年、第二章。

20) Flaubert, *Correspondance*, t. I, p. 19; t. III, p. 202.

21) Flaubert, *Correspondance*, t. III, pp. 141-143.

下している。これは古代インドからエジプト、ペルシア、ギリシア、ローマにおける民衆の神話と心性を叙述した壮大なスケールの心性史である。歴史家本人から著作を贈呈されたフロベールは、受け取ってすぐ一気呵成に「十時間でこの素晴らしい本²²⁾」を読了した、と11月22日付のミシュレ宛の手紙のなかで絶賛した。ミシュレほど「幻視者」の名にふさわしい著作家はいないし、アレクサンドロス大王の歴史に関する解釈はきわめて斬新だとフロベールは感嘆の言葉を連ね、「師よ、あなたは何ともいえない優雅さで読者を熱狂させます」とルーアン郊外クロワッセの邸宅から書き送ったのである。

とはいえ、ここには多少の社交辞令も交じていたことは否定できない。同じ時期、ロジェ・デ・ジュネット夫人に宛てた手紙においては、『人類の聖書』の評価にいくらか留保をつけているからだ。全体構想が脆弱で、議論の論理的展開がいくらか堅固さを欠き、インドに関する章に見られるようにミシュレはよく知らないことについても語っていると批判する。それでもアレクサンドロス大王に関する章は独創的だと称賛した後、ミシュレが「歴史学を詩の高みにまで高めた²³⁾」功績を認めるのにやぶさかではなかった。学問的な不十分さが引きおこす欠落さえ詩的な美によって相殺され、ミシュレの著作は比肩するもののない独自の作品に仕上がっている、とフロベールは評価したのだった。

『ブヴァールとペキュシェ』第四章

晩年のフロベールは、歴史学という学問にたいしてかなり懐疑的になっていた。そのことを間接的に証言してくれるのが、『ブヴァールとペキュシェ』にほかならない。この作品では、遺産を得た初老の二人の男がノルマンディー地方の田舎に隠棲し、暇と関心の赴くままにさまざまな読書や実験に手を染め、そのつと挫折と幻滅を繰り返す。人文学、社会科学、そして自然科学など同時代のあらゆる知の領域を横断して展開する物語は、痛烈なイロニーと醒めた諧謔に満ちているものの、フロベール文学の一特質である百

22) Lettre à Jules Michelet, 22 novembre 1864, *Correspondance*, t. III, p. 414.

23) Lettre à Edma Roger des Genettes, novembre 1864, *Ibid.*, p. 415.

科全書的な知の総覧を企てた野心作であることは間違いない。

小説の第4章で、自分たちの国の歴史について無知だと悟った二人の主人公は、友人を介してフランス史関連の書物を数多く手にいれ、読み耽る。ブヴァールは「物語的歴史」を代表するティエリーの『フランス史に関する書簡』（1825）を読んで、フランス国家と国民の成立について蒙を啓かれ、高い評価をください。二人がとりわけ熱中するのは、フランス革命史である。ビュシェとルーの浩瀚な『フランス革命議会史』（1834-38）から、アドルフ・ティエールの『フランス革命史』（1823-27）まで、さらにはモンガイヤールやガロワなど今日ではまったく忘れ去られた歴史家の手になる革命史を含めて、多くの著作が彼らによって熟読され、批判されていく。そして彼らは歴史家たちの解釈がしばしば矛盾しており、個別の歴史家においても誇張された細部と史料の不十分な検証のせいで、著作全体の歴史観が信憑性を損なわれていることに気づくのだった。

ある人たちにとってフランス革命は悪魔的な事件である。他の人たちは、それが崇高な例外だったと言明する。当然ながら、どちらの側でも敗者が殉教者ということになる²⁴⁾。

歴史が勝者によって書かれる、ということをフロベールは知っていたのである。やがてフランス革命史の著作に倦んだブヴァールとペキュシェは、歴史哲学へと関心を移す。しかしそれもまた彼らを十分に説得することはない。歴史の流れは神の摂理によって統括されているというボシュエやヴィーコの摂理史観に辟易し、ロマン主義時代の「哲学的歴史」の議論にも納得することはない。二人の考えでは、それぞれの歴史家が何かひとつの大義名分、思想体系や宗教や党派や国家を擁護するために著作を構築している。歴史書は、その書き手のイデオロギーから切り離されたところで書かれることはないのだ。作家フロベールは『ブヴァールとペキュシェ』を執筆するために膨大な

24) Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, *op.cit.*, p. 187.

量の書物を繙き、読書ノートを積み上げ、その読書ノートの余白にみずからの注釈と判断を律儀に書きつけた²⁵⁾。それらを参照すれば、二人の主人公の反応が、フロベール自身が到達した結論に近いことが分かるのである。

新たな歴史小説の美学に向けて

初稿『感情教育』の主人公ジュールは、ロマン主義時代の歴史小説に不満だったし、『ブヴァールとペキュシェ』のなかで主人公たちがスコットとデュマの作品を手取る時も、同じような反応を示す。彼らは歴史上の事実や出来事をみずからの潜在的な歴史哲学に従属させてしまう傾向があり、その偏向が歪曲された歴史観を生じさせるとフロベールは考えていた。ティエリーやミシュレの歴史学と競合するためには、歴史小説の作者は二つの責務を果たさなければならない。第一に、一定の時代と社会について可能なかぎり正確で、網羅的な知識を獲得すること、そして第二に、歴史学が沈黙に付すことを想像力によって再構成することである。歴史の推移をめぐって、歴史学があえて述べないことを文学は表象することができるだろう。それがジュールの達した、そしてさまざまな逡巡と知的探求の末に作家が達した結論だった。

確かに困難な作業である。同時代の歴史小説に満足していなかったフロベールは、書簡集のあちこちや、作品のなかで間接的にその不満を吐露した。すでに指摘したように、19世紀フランスは歴史研究の原理と歴史叙述の美学を根本的に変え、歴史研究の対象を拡大し、刷新した時代である。そうした知的な推移を背景にして、フロベールはみずからの作品において新たな歴史小説の構図をうちたてようとするだろう。

1860年代に発表された二つの小説が、歴史の表象に大きな位置を付与し

25) この点については次を参照のこと。Louis Demorest, *À travers les plans, manuscrits et dossiers de « Bouvard et Pécuchet »*, Les Presses modernes, 1931; Jacques Neefs, « Noter, classer, briser, montrer, les dossiers de Bouvard », dans *Penser, classer, écrire de Pascal à Pérec*, Presses universitaires de Vincennes, 1990.

ている。『サラムボー』は、紀元前3世紀、ローマと覇を競った北アフリカの都市国家カルタゴを舞台にして、カルタゴ軍と蛮族の傭兵軍の血なまぐさい抗争を語る。それは力と権謀術数が人間の運命を決める、荒々しくも絢爛たる物語世界になっている。作家がこの作品を執筆した時代とは一見したところ何のつながりもなさそうな古代史の挿話のなかに、じつはまさに19世紀フランス社会の伏流として存在した社会階層の闘争を読み取ることも可能だろう²⁶⁾。

ひとつの時代の相貌、ひとつの「世代」の心性を全体的に表象したいというあのジュールの文学的理想は、四半世紀後の作品『感情教育』においてほぼ達成される。1864年10月、作品の執筆に着手して間もない頃、フロベールはある手紙のなかで次のようにみずからの意図を披瀝していた。

私は一か月前から、パリで展開する現代風俗小説に取り掛かっています。自分と同世代の人々の精神史 *histoire morale* を書きたいのです。「感情史」というほうがより正確かもしれませんが。愛と情熱の物語ですが、今日ありうるような情熱、つまり受動的な情熱の物語になるでしょう。私が着想した主題は真実味にあふれていると思いますが、まさにそれゆえにあまり面白くないかもしれません²⁷⁾。

「自分と同世代の人々の精神史」を書きたいというフロベールの意図は、この作品の歴史的次元をよく伝えてくれる。作品全体を貫く思想、テーマ、歴史背景、時代風土などは既に明瞭に構想されていて、完成作でも大きな変化を蒙ることはない。『感情教育』では、パリを舞台にして、1840年から二月革命を経て、1851年12月のルイ・ナポレオンによるクーデタまでの時代と社会の変貌が、主人公フレデリックの脆弱で不毛な愛と対位的に描か

26) イギリスの研究者アン・グリーン視点である。Cf. Ann Green, *Flaubert and the Historical Novel*, Cambridge, Cambridge University Press, 1982.

27) Lettre à Mlle Leroyer de Chantepie, 6 octobre 1864, *Correspondance*, t. III, p. 409.

れる。そしてこの小説の結末は、一世代に共通した理想と夢が最終的に破産したことを告げている。

歴史上の人物の扱いについて言えば、これら二つの小説はまったく異なる。女主人公サラムボー（カルタゴの將軍ハミルカルの子という設定）を除けば、『サラムボー』の主要人物はすべて、フロベールが参照した歴史書に実際に登場する者たちである。そして物語の筋立てのうえでも主題のうえでも、決定的な役割を付与されている。他方『感情教育』には、実在した歴史上の人物はひとりも登場しない。せいぜい名前として言及されるにすぎない。それは固有名が不在の、あるいは固有名が意図的に抹消された物語世界になっているのだ。

ここで詳細な分析を施す余裕はないが、描かれている文明、時代、環境、物語構造などは異なるものの、どちらの作品も小説の言説のなかに、歴史を組み入れる新たな技法を例証し、それによって文学と歴史学の関係性に新たな可能性を示したという点では一致するのである。少年期から歴史と、同時代の歴史学の動向に関心を抱き、長じては青年期の作品や、友人・知人宛ての書簡において作家や歴史家の著作を批判的に検討することをつうじて、フロベールはみずからの歴史観と、歴史小説の作法を構築したのだった。